

はしがき

G. O

82才で『近代民主政治』1,200頁を書き上げ(1920年)、民主政治の研究の一權威となったブライスは、

『人間の本質の研究が永久的な政治の根柢である』

『いろいろな制度の研究ではなく、主として人間性の研究—即ち心理学、倫理学、経済学から資料を求むべきである』

『人間の本性こそ、あらゆる社会現象のキソであり、社会科学全体のキソとなるものである』

など、いく度もくり返しくり返し、何よりも『人間の研究』を民主政治のキソづけに欠くべからざるモノと断定している。しかし、その『人間の研究』は、その後20年近くたってカレル博士の『人間—(この未知なるもの)』が出るまで後まわしにされていたのである。

まことにブライス卿のコトバの通り『人間の研究』なしには、いかなる政治、ことに民主政治や、社会制度の研究や改造はあり得ないであろう。また、その他のあらゆる学術や研究は、『人間の幸福と正義』を終局のネライとするのであるから、『人間の研究』、『人間性についての知識』が何よりも先ず第一に必要である。たとえば自然科学の様なものでも、結局は人間や人間の幸福を作る環境や条件の研究に役立つのでなければ全く無意味なものである。『人間の幸福と正義』というのは、

(イ)人間とは何か(ドコから来たか、ドコへ行くのか。何が人生の目的であるか)

(ロ)幸福とは何か(一体全体何が幸福であるのか、いかにすればノレは得られるか)

(ハ)正義とは何か(われら何をなすべきか?)

ということが分らなくては定められない。『人間、幸福、正義』を確立することが最大の、そして第一の急務であるのに、コレが今日まで確立されなかったのは、これが一番六カしい、一番大きい問題であったからである。

宗教はこの(イ)を解決することを第一のネライとし、倫理や道徳は(ハ)を、経済学や政治学は(ロ)をネライとして来たのであるが、いずれも一応の当座の時代時代の解決を出し、その役をつとめて来たのであるが、今はいずれももう時代おくれとなっている。それに余りに硬化したり、部分的でありすぎたりしている。今は単一、一元の世界社会を要求する時代になっている。いまはそれらすべてを総合し、一つの世界共通の宗教、一つの世界共通の道徳、一つの世界共通の経済、一つの世界共通のコトバが要求され、人類はじまって以来、ここに始めて人間全体の社会、全人類最高の総合文化建設の時代になっている。

(イ) (ロ) (ハ) の3つとも、つづめてみれば一つの『生活の指導原理』である。

だから、人間にこの3つが欠くべからざるモノである以上、何れを主にしてもいけない。

3つを1つにしたものでなくてはならない。

新しい時代が来たのだ。

『人間』の『生活』の指導原理が入用である。新しい『正義』、新しい『幸福』は何れも世界共通でなくてはならない。『新しい』ということはつまり『世界共通で、永遠なるもの』ということである。あらゆる人間が万人が、そしてあらゆる時代が、よってもって立つところの基準が入用なのである。それは『人間』すなわち全人類のモノであり、その生活の基準でなくてはならない。アラユル不安や、戦争や、アラソイの原因はいつでも広くなり、大きくなる生活圏に適しなくなった古い観念や制度であった。だから今日は、すべての古い、硬化した、小さい観念や秩序(制度)が一掃されなくては平和はこないのである。

新しい、永遠に新しい、全世界、共通の『生活指導原理』が入用である。それにはまず『人間』を知ることだ。

×

マルクスは万人の、ことにプロレタリアの『幸福』をネライとしたのであるが、いつの間にかそれがヤハリ『経済生活』に分ける幸福—つまり『福』だけを主としたものになっていた。つまり (ロ)の一部になって了ったのである。マルクスの偉大をもってしてもこれであるから他はおして知るべしである。要は『人間』の研究が肝要なのである。生活全体の指導原理の確立が最も大きな先決問題なのである。吾々は「人間の問題」を研究している中に、いつか「人間」を忘れて、「問題」だけにとられるのである。でない、「問題」にとられる位ならまだいい方で時とすると「問題」をとくための「手段」だけに沈没して了うことさえある。独裁政治やドレイ政治や、国際聯盟や、甚だしきは武力強化に堕ちて了うことさえある。こうなると「人間」も「幸福」も、「正義」も忘れられて了う。

×

およそアラユル政治は二つの大目的がある。『正義』と『幸福』。アラユル新しい政治は、萬人に承認されるために最も簡素な形をとらねばならず、その為に必ず人間の理性と感情に訴える。しかるに人間は感情の動物であるから、理性よりも感情に多く支配される。そこでベンタムよりもルッソオの方が千倍の共鳴者を得ることになる。ところが感情は、硬化した秩序をうち破るには早く成功するけれど新しい理念の建設には必ず失敗する。すべての革命がユートピアやエレホンに終わるのはその証明である。だから感情と理性をうって一丸とすることが必要である。これで『人間』の研究の必要さの大きさが分る。私はこの辺をネライとして、本能主義(インスチンクチヴィズム)を主張しようと思う。これは

空前の主張で、私独得のものである。これは、人間とは何かを究明する一切の科学と、幸福とは何かを決める一切の哲学を、『実生活』にまとめて一つにするのに本能を用いるという主義である。(本能というのは萬人に生まれながらそなわっている明智を本体とした命令行動本部、分かりやすく言えば学校で教えられないで萬事を判断し、処理する本源的な能知である。生命の本体であり、宇宙全体の秩序に人間を適合させるモノである。)

×

『現代の文明の自滅を救う書』といわれる『平和の解剖』(エメリー・レーヴ)は、「世界の平和」(幸福と正義の確立された世界)を確立するために、戦争の原因をつきとめ、それを除去すること、即ち各国家の絶対主権を制限して、一つの世界器官で各国家間の関係を律することより外はないという。

トコロがこの「主権が人民にある」というのが根本原則デモクラシイである。その人民というのは人間の集まりであるから、人間を知らずにデモクラシイを語ることはできない。『平和とは、法に基く秩序である』トレーブは言う。

しかるに『法』とは何であるか、秩序とは何であるか。

すべての法はただ一つの、万世不易の、万国共通の丕基に約される。それは『生命の原理』であり、人間の原理とも、人類の原則とも、又宇宙の法(秩序)ともいうべきものである。だが『人間』の研究は結局するところこの生命の原理=『宇宙の秩序』の発見への道である。この『道』の住きが、マコトの学問『行』であって、帰りが幸福『実生活』である。古来、人間はこの『行』を理性で、実生活(幸福)を感情にゆだねて来たので、長い間学問と時生活が一樣にならず、科学と宗教が合わず、肉と霊がバラバラになって、アラユルなやみとアラソイを生み出して来たのである。反対にこの学問を情熱で、実生活を理性でやればウマクゆくのであるが、何分『人間』自らがその何れか一方、理性に片よったり、感情に片よったりしていたのでウマク行かなかったのである。が今こそ数千年の悲劇の歴史をつくり上げた後に人間は人間革命の時代に漸くたどりついた。現代はこの『人間革命』の時代である。現代のナヤミとアラソイは人間革命を完成するための過程に外ならない。

ところで、人間革命をやるためには『人間』そのものを知りきわみなくてはならない。そこでカレル博士は30万年来の『人間』についての知識を一切まとめて、その試算表をつくって見たのである。その報告書がこの『人間—この未知なるもの』である。これはその名の示す通り『人間は未知である』という結論を示すものではあるが、いかほど人間が人間について無知であるか、という無知の程度を先ず知ることは有用であろう。私はカレル博士とは全く違った道を歩いた一東洋人であるが、それだからカレル博士の協力者になる資格はあると思う。本文で、一寸ノースロップ教授や、トインビー博士やルコント・ジュ・ヌイ博士の主張にふれておいたが、これらの西欧文明の最先端をゆく人々は、東洋精神的

な見方を取り上げる必要さを絶叫している。そこで私がこの『人間』を約出したことや、その解説を書いたことの意義がハッキリするだろう。

×

平和とは、法に基く秩序である。

あらゆる法はつづまるところ『宇宙の秩序』に帰するのである。社会秩序とは宇宙の秩序の模写であり、写実であり、実生活への翻訳であり、人間化であり、生きることである。そして理想的な『人間』、つまり平和に秩序のある生活をする『人間』とは宇宙の秩序(自然)に法った、材料—自然的な食物をもって作り上げた健康な(自然な)人間なのである。自分の病弱を出発点として永い間、西洋と日本で、食生活に宇宙の秩序をムスびつけることによって、多数の人に健康(自由)と幸福(平和)を設計する方法を辰えた体験から、一切のアラソイとナヤミの根源が不自然な食生活によって生れることを確信する私は、このカレル博士の『人間』を、この地上に自由と幸福の確保された、新しい社会を建設せんとする全ての人々に提供することに大きな光栄とヨロコビを感じるものである。つまり私は本書で、カレル博士の『人間—この未知なるもの』を解説し、その『未知』をとく「新しい栄養学」、「新しい生化学」の実用的な応用法を近著『人間革命の書』や 2、3 の旧著によって示し、人間性の秘密を明らかにし人類の歴史に空前な、アラソイとナヤミのない一元世界の建設に、役立てたいのである。

本文の複写、複製、転載、その他いかなる方法による使用の際には日本 CI 協会にご相談ください